



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第30号

平成24年6月発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



— こういう時代・環境であればこそ —

深めよう 母校・同窓との絆を！

— 震災被災学生支援に感謝 —

同窓会長 三 上

たつみ
巽

6,570余名の同窓・OBの皆さん

私共の母校、国立大学法人弘前大学農学生命科学部は昭和30（1955）年に農学部として創立され、

その後、平成9（1997）年に農学生命科学部として改組のうえ本年58年目を迎えますが、この3月現在で6,579名の同窓・OBの多くを数えるに至りました。



1. 学内圃場水田わきのチューリップ、 2. 島善燐先生顕彰碑（学内圃場内）、
3-4. 白神自然観察園、 5. りんご初生りの碑（医学研究科敷地内）

現在弘前大学は5つの学部を擁しておりますが、同窓会は各部ごとに学部創立後余り期間をおかずして組織され、弘大50周年記念事業実施時の平成11(1999)年に各部同窓会の会長、副会長等をもって構成される全学の同窓会「弘前大学同窓会」も組織され今日に至っておりますが、学部同窓会5つの中では、本学部同窓会は事務局を担当していただいている教職員の方々の教育・研究業務多忙を極める中での献身・ボランティア的な対応により、会報の発行、卒業生の卒業祝賀会の実施と記念写真の贈与、名簿の整理保管、並びに各種学部支援対策を含め、その取り組み活動実績は他学部同窓会等からも相応の評価がなされております。そのような状況の中、昨年度から今年度にかけて新規に興した対策につきまして、以下その概要を報告させていただきます。

東日本大震災被災学生への支援事業の実施

被災学生への国及び大学本部による支援措置とは別枠の本学部独自の支援対策として、鈴木学部長主導のもとにPTA的組織である「学部後援会」と同窓会が協調して①実家が被災した学生への支援措置として10万円(無利子)を貸与。②前記①の貸与とは別に3万円を贈与することとし、これに伴い100万円を23年度予算で措置したところであり、この予算内であれば24年度においても対応することにいたしました。

なお、震災支援予算の財源の一環として、同窓会員の皆様方に義捐寄付を募りましたところ56名の方々から284千円の寄付をいただきました。ここに慎んで感謝御礼申し上げます。

支部活動活性化対策の実施

同窓会員の年々の増加に伴い、これら会員の勤務・在住地も東北・北海道及び首都圏域等広域多岐に亘るようになっていくことを踏まえ、各支部における同窓の絆を深めて頂くことを期待し支部の総会等、活動の活性化を図る会合等の開催通知

案内に要する通信費について本部より支給することにいたしました。事後における精算請求でもよろしゅうございますので、是非とも活発な利用をお待ちしております。

こういう時代・環境であればこそ

～母校キャンパスを訪ねてみませんか～

同窓・OBの皆さん。3・11大震災以降、地域・人々の「絆・繋がり」の尊さ・大事さが改めて喧伝されるようになりました。私は昭和19(1944)年生まれで初期高齢者世代になりましたが、昨今の私共を含めた人々を取り巻く時代・環境は安心・安全で穏やかな生活・人生を過ごすには、必ずしも容易ならざる状況にあるのではないのでしょうか。

そういう時代・環境であればこそ、かつて社会人として巣立つ前の若き青春時代の一時期、東北の小京都とも称される城下町・弘前で遊学された母校・弘大での良き思い出を辿るリフレッシュの旅を楽しんでみては如何でしょうか。皆さん方が学ばれた往時に加え、弘前市内の町並みも、また弘大のキャンパスもかなり変容いたしました。弘大のキャンパスには昨年、本学部ゆかりの記念碑として「りんご^{はつな}初生りの碑」(医学部構内)「島^{よしちか}善隣先生顕彰碑」(農学生命科学部構内)が建立されましたし、また近年、西目屋村には「弘前大学白神自然観察園」、藤崎町の弘大藤崎農場内に「ふじのふるさと記念広場」が開設されるなど、学生時代を偲びながらの心身共々の癒し・リフレッシュの機会満喫できる場が整備され、同窓・OBの皆様方の御出を誘っております。

津軽路弘前・弘大を巡る旅が必ずや同窓・OBの皆様と母校との絆を深め合う機会になることを期待しつつ、皆様方のお出かけをお待ちいたしております。



6年間の一貫教育により 専門教育プログラムの実現

農学生命科学部長 鈴木 裕之

弘前大学農学生命科学部は「生物学科を有する農学系の学部」という特徴を前面に出すべく、平成20年度に4学科から5学科に改組しました。生物学科、分子生命科学科、生物資源学科、園芸農学科、地域環境工学科から構成されています。そして、平成24年度には、これら5学科に対応させた「1専攻5コース制」の大学院修士課程が整備されました。これにより、学部では専門基礎教育を重視して教育の実質化を進め、これに連結した大学院ではそれぞれの専門分野において合計6年間の一貫教育により専門教育プログラムの実現が図られることになりました。大学進学率が向上したことに伴う、新入学生の学習度に合わせた大学・大学院における教育改革によるものです。

なお、これまでの大学院とは異なり、「農学生命科学」という一つの専攻のもとに、学科に対応する5コースを設置しました。その理由は、他の専門領域との垣根を低くして、隣接する学問領域の学修を促そうとしたものです。したがって、学生の専門分野に留まらず、他コースで開講されている関連科目を履修できるような教育プログラムとしました。

さらに、関係者のアンケート調査では就職に有利な講義を開講して欲しいとの声も寄せられており、多様な進学希望に対応するために、研究者養成型の「学術研究プログラム」と高度技術者養成

型の「実践研究プログラム」を設定しました。両者では学習体系が一部異なります。また、選択科目の多くは1単位科目として修了要件の限られた単位数内で、例えば“より広く”専門科目を選択できるようにになりました。学部教育の中で、自分が興味をもって選んだ専門分野について、“より深く”あるいは“より広く”学習したいと意欲を持った学生が、新しい大学院農学生命科学研究科への進学を目指してくれることを期待するものです。

弘前大学農学生命科学部教員一同は、昨年の未曾有の東日本大震災、またその後の福島第1原発の事故による被害に対して学術がどこまで有効に貢献できるかを今後真剣に考えていかなければなりません。被災地の復旧・復興に積極的に関わっていく有為な人材を輩出していくのは勿論ですが、今、大学は何をすべきなのかが問われているのだと思います。大学における学術と同窓生の皆様の実践力・応用力とが連携して復興計画を進めるのも一つの手段であろうとも考えます。これが弘前大学の大学力であり、それを発揮するのが大学の使命であると考えております。ここで紹介した新しい大学・大学院の一貫教育プログラムがその一助になることを祈念するものです。同窓生の皆様との新たな連携が実現することを切にお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>) からダウンロードできます。

定年退職教員からの寄稿～1



御指導・御支援・学生に感謝

石田幸子

私は、昭和40年4月に文理学部改組後の理学部一回生として入学しました。入学式は旧制弘高時代の講堂で行われ、この時は理学部として入学し、1年半後に希望調査により数学科・物理学科・化学科・生物学科に分かれました。当時教養部から専門に移るには、1単位落としても進むことが出来ないという厳しいものであった為、ドイツ語1単位落として泣いた人が何人もおり、生物学科は20名の定員のところ10名しか進級出来ず、文理学部の留年生3名を加え13名の学生しかおりませんでした。それに対し生物学科の教員は3講座で9名おられ、佐藤光雄教授の研究室希望者は私1人で、今から考えると本当にぜいたくなマンツーマンのご指導を頂いたこととなります。私が所属した通称1講座（動物生理・発生学）の助手の先生が私の卒業と同時に丁度御結婚により、東京女子医大の方に転任されることになった為、その後任としてラッキーなことに私がそのまま助手として採用されることになりました。当時、弘前大学理学部にはまだ大学院が設置されておらず、大学院に進みたい学生は他大学の大学院に進学しなければならない時代で、ポストドクがあふれ、ドクターの学位がないと助手にも採用されない就職難の現在では全く考えられないことです。私は、佐藤先生の下では魚を材料に動物生理学的研究をしておりましたが、7年後に定年退職されましたので、その後は教授に昇任された手代木渉先生の下で、プラナリアを材料にした発生学的研究に従事し、今日に至っております。手代木先生も、平成3年に定年退職されましたので、専門の講義「発生

生物学」と「実験形態学」は、私が受け継ぎました。

平成9年に学部改組が行われ、私は理学部から農学生命科学部生物機能科学科の所属になりましたが、平成20年度には4学科から5学科に改組し、生物学科に所属することになりました。その為、理学部生物学科第1回生の私は、奇しくも農学生命科学部生物学科第1回生の卒業と共に退職するという巡り合わせになりました。

43年間さまざまなことがありましたが、素晴らしい恩師にご指導頂き、周りの方々からご支援頂き、良い共同研究者・学生に恵まれ、本当に幸せでした。嬉しいことに、3月17日に教え子達が全国から参集し、私の退任祝賀会を開催してくれました。次の日、北海道から来てくれた一人から早速メールを頂きました。“会に参加させていただき、大変温かい気持ちになりました。とても、心にしみる会でした”と、書かれており私もその夜同じように感じましたので、教え子達から素晴らしい会をプレゼントされ、このような時間を共有出来たことは、教師として本当に有り難いことです。今後は、若い後任にバトンタッチし、自宅でゆっくりとまだ未発表のデータをまとめる作業に勤しむ予定です。

長い間お世話になりまして、真に有難うございました。同窓会会員各位の御健勝と益々の御活躍、そして御多幸を願っております。

定年退職教員からの寄稿～2

弘前大学での7年と4カ月

片方 陽太郎

冬の到来がまじかに迫った2004年11月に弘前大学農学生命科学部に赴任した。ある程度覚悟はしてきたがほとんど何もない状態であり、しかも用意された部屋は乱雑なままであったところが良い印象を受けなかった。しかし、そんなことは一瞬のことであり、「自分の小さな研究室のスタートである」と考えなおし使いやすいように改善して事を前に進めた。卒論学生が一人もいなかったことは、自分で実験を、という気にさせてくれ好んで実験台に向かったものであったが、じきにこの状態を継続することは出来なくなった。会議、講義の準備（小生は後期に専門科目が2つ）、委員会さらに新任教員ということで、次々とセミナーや研究発表会の出番が回ってきたものであった。徐々に卒論学生が増えてきたが、一層、研究以外の仕事も増加の一途をたどっていった。

日・祭日以外の月曜日から土曜日まで、朝9時から夕方6時まで、しかも土曜日の朝から毎週ゼミを開催するというスケジュールで、一緒に研究をとおして教育をしてきたつもりである。一見、厳しい環境のようにも思えるが、自分自身の経験から環境がとても大事であって、そこでやりぬける人間はどこでもなんとかやりとおせるものであるという、自分の経験があったためでもある。どこか自信のないそぶりを垣間見せる学生を、それなりにするにはこれしかないと思っていたためであった。そんな中、目標がしっかりと定まった院生が現われ、その影響で次々と研究好きの学生が集まってきた。あまり型にはめずに自分で考え、あるいは先輩や仲間との会話、それに文献からのヒントを基に研究の面白さを少しでも経験させるよう常に頭の片隅に置いていた。学会発表や研究論文の作成が軌道に乗り始めたのは、この2～3



2人の学生表彰受賞者と（2012.2.20）

年前であった。よく“環境はヒトを育て、身分はヒトをつくる”と言われるが、まさにこれを実践してくれた院生達であったと感謝している。退学や休学といった道を選ぶ学生が一人もいなかったのは、良いことであったと振り返っている。これらの2つの選択肢は小生の思うところあまり良い方向には進まないと考えるからである。学生をなんとか育て世の中へ送る時期に入っているが、今の小生の夢は、彼らの今後の成長と活躍を見守ることになりかかっている。

このように考えると人はまさに世の中からも、そして自分自身の研究生活の中でも生かされていることに気づき、まさに“人間万事塞翁が馬”のたとえのように歩んできたことに心より感謝し、今後も命ある限り生きてゆきたい。末筆になりましたが、多くの皆様にお世話いただきありがとうございました。感謝、感激です。

定年退職教員からの寄稿〜3



ヘビーな名残雪に送られて

鮫島 正純

私の農学生命科学部在職期間は9年に満たないものでしたが、いろいろ経験しました。女子学生に驚かされた話は“学園だより”3月号をご覧ください。男子学生の場合では、大学院に進学すると意気込んで卒研を始めた彼の様子がなんとなく気になり、進路についてたずねたところ、「これまでの僕の人生は親の言うなりだったことに気づきました・・・」と語り始め、やりたいことであるコンピューターの専門学校に進学していきました。それ以来、学生の相談に応ずる際には、「あなたが本当にやりたいことは何か」を見つけることを第一にすすめ、そのための方法を一緒に考えるようにしました。そのせいかどうかはわかりませんが、最終講義の直後に私の研究室所属ではない学生が何人か、わざわざ挨拶に来てくれたことは、うれしい話です。

赴任の翌年が大学の法人化で、それに合わせて、それまで準備室であった学生就職支援センターが動き始め、私は初代の兼任教員の一員を務めました。武道館で開催した合同企業説明会は、教職員・学生が机や椅子を並べる、まさに手さぐり、手作り状態でした。このセンターの任務から、「学生の意識と企業(学外)の期待、大学の理念」の総体として、大学の立ち位置が決まってくることを実感しました。したがって私たちが学生であった頃とは、大学の「業務」が大幅に変わっていることとなります。

さらに実感したのは、学部により状況は異なりますが、弘大全体でみると同窓会組織の脆弱さでした。農学生命科学部の場合は、農学部時代の同

窓会を土台があり、形を成していますが、卒業生の加入率が最近では芳しくないようで、危惧しております。この1月には、同窓会担当の工藤明先生に、福島県同窓会支部“わんどの会”に合流する機会を設けていただきました。会長をはじめ皆様にはお世話になりました。参加されたのは、県庁の中堅どころが中心かとお見受けしました。私は評議員を務めている立場から、今回の震災と原発事故に関して、これまでの弘大の対応を紹介しました。保健学科をはじめとした多くの取り組みや浪江町との連携協定などを、県庁におられる方ですら、多くをご存じない状況でした。また、震災・原発事故当時、県庁と出先でかなり混乱していた様子もうかがい知れ、「大変なこと」が起こったのだと改めて実感いたしました。これからの関係者のご奮闘をお祈りします。

退職間近になり、なじみの“お店”で、普段は学生の話はしないのですが、「まだ就職が決まっていない学生がいるのが心残りだ」ともらしたところ、初対面のお客さんが「先生のその言葉に感激しました。私のところで雇いましょう」と、一言。実際にはまだいくつかの手順が必要でしょうが、世の中にはこんなことがあるのですね。いっなくな大雪の今冬、3月20日過ぎても名残雪にしてはヘビーな降雪。でもこの一件で、わたしのところは一気に雪解けとなりました。



東日本大震災からの 復興に立ち向かう同窓生たち

昨年3月の大震災からの復興に尽力されている同窓生から、ご寄稿いただきました。

明日を信じて

多田 眞一

雪印種苗株式会社飼料部鹿島工場長

(昭和60年園芸化学科卒、昭和62年大学院農学研究科修了)

昨年4月11日、茨城県神栖市内の工場長として着任しました。東日本大震災から1ヶ月後、被災の復旧に寄り添うことになりました。着任当日、大きな余震で津波警報発令、従業員全員が工場棟5階に避難、その指揮を執ることが初仕事となりました。関係会社も合わせて約50名の命を守ることの責任の重さを痛感しました。3月11日、神栖市は震度6弱、津波が数回押し寄せ最大で約6mを記録、港にあったコンテナが幾つも住宅地まで流されました。当工場が位置する地区に津波の被害はなかったものの、原料を荷揚げする港の大型機械が損傷し能力は平時の3分の1に低下しました。周辺道路や構内の陥没亀裂、建物の損傷はいたるところに生じ、断水など多くの制約の中、それでも致命傷はなく3月14日一部生産を再開しました。さらに津波被害で生産を停止した東北の工場を補うための生産を10月まで続けました。追い討ちをかけ7月1日からは電力使用制限令が発動、平日日中の使用電力量に上限が設定、そのプレッシャーとも取り組むことになりました。これも関係者の取り組みにより違反なく9月2日解除を迎えました。会社内外のたくさんの方々の支援を受け着実に復旧を果たしました。加えて原発事故による様々な困難とも向き合うことになりました。まだまだ地震も続いており、次への備えも怠れません。



家畜用配合飼料の生産高は全国で年間約2,400万トン、神栖市の同じ地区にある11工場の生産は年間約400万トン、全国の約2割を占めています。私共の工場は、その一角で牛用配合飼料を生産しています。品質の維持向上と安定供給に日々従業員が力を合わせ取り組んでいます。この事は復旧の中でも片時も忘れることはありませんでした。そして、もう一つ大切にすることが従業員の心身の健康と安全の確保です。保健士の個人面談、安全パトロールによる危険箇所の改善などに気を配りました。その成果は2年間以上続く労働災害ゼロにつながっています。

終わりに、東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災からの復興に尽力されている皆様に心よりエールを送ります。明日を信じて、私も支援を続けることを約束し筆を置きます。



村松 秀 則

福島県北農林事務所農村整備部勤務
(昭和53年農業工学科農地工学教室卒)

勤務時間に放射性物質に関する種々の報告書を読み、普段お付き合いしている土地改良区、水利組合ばかりでなく個々の農家と直接繋がりのある普及職員、JA職員を通し農家個々に「農業用水の管理に関する留意点」を伝えるための資料作りをしている自分を誰が想像したでしょうか。3月上旬に「放射性物質に汚染された農業用施設の維持管理指針」を管内市町村及び土地改良区に通知してはありましたが、4月下旬からの通水に向け『ため池』『頭首工』『揚水機場』『水路』『水田の取水口』に毎の留意点を再度確認するとともに用水路や水田毎にちょっとした仕掛けを広めようと老化し始めた頭を絞りながらパンフレットを作成しております。福島では、今だ出口の見えない戦場が続いているのです。

昨年の3月11日は、福島県最後となるダム事務所閉所のための片付けをしておりました。事務所は、福島第1原発から9km、第2原発から2km、太平洋まで散歩で行ける距離(600m)でしたので、津波も来てしまいました。(直ちに高台に避難したため津波は見ておりません。)地震当日は、自家発電装置のあるダム管理事務所で過ごしましたが、次の日(12日)には朝に10km圏内、夕刻に20km圏内に避難命令が出て川内村に避難しました。

避難と同時に、バスで避難してきた特養の方々の世話を言い翌13日(日)からは、役場職員と一緒に避難所の運営、災害対策本部業務に参画し福島に戻ったのは16日(水)の夜中でした。15日(火)の2号機、4号機の相次ぐ爆発により富岡町と川内村の方々が再度避難することになったため、我々も福島に向かったのですが、途中、田村市滝根町の避難所に送った職員を福島に連れて行くことに難儀しました。相手は原発事故、県としての避難所支援でなく町役場の人と一緒に最初から避難所を運営していたためすっかり町の職員になりきっており、福島に行くことは、町民を見捨てると思うようになるような活動をしていたようです。富岡町からは、今でも広報が届きます。何時になったら、相双地方&福島県が元の状況に戻ることが出来るのでしょうか？

福島県及び県内の市町村では、農水省及び全国各地の都道府県から支援をいただきながら、災害の対応をしてくれています。原発事故さえ無ければ、他の県と同じ歩調を歩む事が出来るのでしょうか生活基盤だけでなく生活そのものも壊れている状況が続いております。我が家でも、休み毎に息抜きをしながら生活しており、その内青森にも行ってみたいと思っております。

井 上 達 志

宮城大学教授
(昭和58年農学科卒)

宮城県は地震と津波で最大の被害を被り、その後の放射能汚染は県南部で高度に及びました。あれから一年と3カ月が過ぎようとしています。私は宮城大学の食産業学部で教育と研究に奉職して

います。動物の飼料と健康に関することを専門としているので、ある調査チームから手伝いの依頼がありました。それは、福島警戒区域内で取り残された家畜のうち、農家から解放された牛や

豚は、相当の被曝をしながらも一年近くを自力で生き抜いてきたのですが、農水省の方針で彼らは安楽殺を施されることになっていました。調査チームは彼らが安楽殺された直後に解剖をして各臓器を取り出し、どの臓器にどのくらいの放射性物質が蓄積されているかを調べるものでした。特別な許可を得て原発まで数キロというような所まで肉薄して作業をしたりするのですが、身に付けた被曝線量計の数値がみるみるうちに上昇するなか、山のように積み重なった数十の和牛や豚をいくら解剖して調べても、まだ体温が感じられる牛や豚たちは健康そのものに見え、肉眼では全く異常は見出せませんでした。そうして雌の家畜は、そのほとんどすべてが、お腹に、小さな、しかしどこにも異常がない胎児を宿していたのです。私は当時の農学部で豊川好司先生をはじめ、坪松戒三先生そして高安一郎先生から畜産学を学び、その後30年近く畜産の発展に努力してきましたが、この時ほど家畜達が哀れに思えた時はありません。全くの無人の、時間が3月のまま氷付いてしまった村の深く掘られた泥濘の穴の底で、放射能を放つ黒い屍の山から泥と血にまみれて臓器を取り出す

防護服とマスクに身を包んだ異様な姿の自分が、悪臭を振り撒く地獄からの使者のようにまことにおぞましく見えました。

大規模災害に際しても、東北の人々のモラルの高さと気高さは世界から称賛されました。今回の災害は大変な犠牲を伴いましたが、同時に多くのことを我々に気がつかせてくれました。犠牲になられた多くの方々のためにも、よりよい安全な社会を築いてゆかなければなりません。その時の穴の中の光景は、私にそのことを改めて語っていました。

プルシアンブルーと呼ばれるインクや絵の具に使われる顔料はセシウムやタリウムと選択的に強く結びつくことが知られており、チェルノブイリ原発事故の際にヨーロッパではこれを用いた除染が広くおこなわれました。牧草地に散布することで汚染土壌から飼料への放射性セシウムの吸収を防ぐことができますし、牛に投与して汚染飼料からの体内への吸収を防ぐ方法でも効果的です。福島をはじめとして放射線量の高い牧草地や放牧地が多くありますが、このような方法で除染する研究に全力で取り組んでいます。



白神自然環境研究所

平成24年度から白神自然環境研究所の石川幸男教授、中村剛之准教授ならびに山岸洋貴助教の3名の先生方が、大学院農学生命科学研究科の教育スタッフとして加わりました。そこで、農学生命科学部と関係の深い同研究所について紹介いただくことにしました。

白神自然環境研究所 准教授 中村 剛之

世界に誇れる広大なブナの森林が残る世界自然遺産“白神山地”。その裾に位置する青森県西目屋村に2009年4月、弘前大学白神自然観察園が開園しました。弘前大学は白神山地の入り口まで車で一時間ほどとちかく、天気によければ大学のキャンパスから遠くに白神山地の山々を望むこともできます。国内には他に3件の世界自然遺産がありますが、これほど遺産地域の近傍にある大学

はありません。白神山地の研究とこの地を利用した環境教育は、弘前大学の地の利を活かした取り組みと言えるでしょう。

観察園の活動をさらに発展させ、自然環境（生物・気象・土壌など）、環境教育、山里の文化を総合的に研究する事を目的として白神自然環境研究所が2010年10月1日に発足しました。現在観察園はこの研究所の附属施設と位置づけられていま

す。この研究所は所長の下に4つの専門部門からなり、それぞれの部門での研究を行いつつ、互いに協力し合うことでより発展的な研究活動を実施します。

- ① 植物部門 広大なブナ林で知られる白神山地の樹木、草本、菌類などの分類学的、生態学的研究を行います。
- ② 動物部門 哺乳類、両生爬虫類の生息調査、昆虫類、陸貝類、渦虫類などの無脊椎動物の分類学的研究を進めます。
- ③ 地象・気象部門 地形の隆起や地滑り地形などの研究、気象データの収集と長期モニタリングを行います。
- ④ 教育・文化部門 マタギに代表される古くから白神山地と関わってきた人々の森との関わり方、民俗学、当地の考古学的研究を進め、さらに、白神山地での環境教育を推

進めます。

白神山地の自然環境の今を記録し、将来の研究資料として保存するため、植物部門と動物部門では、白神山地とその関連地域の植物、動物、菌類の標本収集と保存、学生や研究者が自由に参照し、調査研究に使うことのできるリファレンスコレクションの構築に取り組んでいます。

白神自然環境研究所では大学の地域貢献の一つの形態として、一般市民を対象とした観察会、セミナーを実施しています。毎回、多くの方々の参加があり、盛況です。こうした活動に積極的に参加する人々のために「白神自然観察園友の会」も立ち上がり、現在約70名の会員が集まっています。白神山地の自然や文化に関心をお持ちの方々のさらに積極的な参加が望まれます。

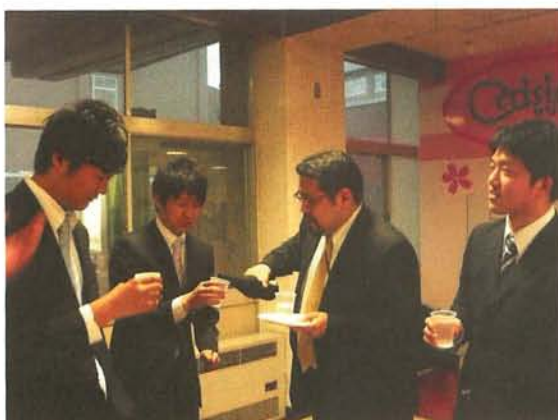
今後の白神自然環境研究所、白神自然観察園の活動にご期待ください。



平成23年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成24年3月23日に、平成23年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は190名、大学院修士課程修了生は44名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は6,579名、研究科修了生は857名となった。

まだ雪の残る学部校舎正面玄関前での記念写真撮影の後、学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会が生協食堂大ホールで行われ、恩師や友人との別れを惜しんだ。



本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。

生物学科

(株)エスタディオ、(株)プロシップ、(株)マエダ、(株)幸楽苑、(株)江戸屋、(株)青森ダイハツモータース、(有)バブコック・スワイン・ジャパン、As-me エステール(株)、ホームック(株)、東江産業(株)、日本カルミック(株)、国家公務員、地方

公務員 (3)、国公立教員：青森県、長野県、弘前大学大学院 (10)、総合研究大学院大学、鳥取大学大学院、北海道大学大学院

分子生命科学科

(株)メフォス、(株)モリタン、(株)ヨーク商事、

(株)江戸屋、(株)青森銀行、リゾートトラスト(株)、山崎製パン(株)、山田水産(株)、青森県予防医学協会、早坂理工(株)、日本データスキル(株)、地方公務員(2)、国公立教員：青森県、弘前大学大学院(15)、東京大学大学院(2)、東北大学大学院

生物資源学科

(株)ニチロサンパック、(株)マエダ、(株)宗谷岬牧場、(株)米沢園芸、(有)葉っぱや、あすか製菓(株)、ソントン食品工業(株)、ゆうき青森農業協同組合、一般財団法人弘前市みどりの協会、弘前大学医学部附属病院、山崎製パン(株)、上北農産加工農業協同組合、東北化学薬品(株)、白石食品工業(株)、私立学校教員、弘前大学大学院(8)、北海道大学大学院(4)

園芸農学科

(株)サクラバ、(株)マルハチ、(株)今野商事 不動産部、(株)丹波屋、(株)北日本銀行、JICA-国際協力機構、イオン北海道(株)、ドラゴンキューブ(株)、レンゴーロジスティクス(株)、茨城県農業協同組合中央会、岩手県農業研究センター、五泉信用組合、自営業、住商アグリビジネス(株)、青森県森林組合連合会、地方独立行政法人青森県産業技術センター、独立行政法人家畜改良センター 熊本牧場、国家公務員、地方公務員(7)、国公立教員：神奈川県、弘前大学大学院(5)

地域環境工学科

東日本旅客鉄道(株)(4)、(株)マエダ、(株)紅屋商事、(株)増川プロジェクト技建、(株)日本水道設計社、(株)夢真ホールディングス、ホームマック(株)、国土防災技術(株)、斎勝建設(株)、社会医療法人 孝仁会、川崎地質(株)、朝日航洋(株)、国家公務員、地方公務員(9)、弘前大学大学院、東京医科歯科大学、北海道大学大学院(2)

生物機能科学科

インフォコム(株)、弘前大学大学院

応用生命工学科

(株)デンコードー、ホクトヤンマー(株)

生物生産科学科

ワタミフードサービス(株)、地方公務員(2)

地域環境科学科

(株)コシイプレザービング、一般財団法人上越環境科学センター、総合商研(株)、自営業、京都大学大学院

<大学院農学生命科学研究科修了生>

生物機能科学専攻

社会福祉法人 函館共愛会 共愛会病院、地方独立行政法人 青森県産業技術センター、東和薬品(株)、国家公務員

応用生命工学専攻

(株)ウィン・コンサル、(株)データベース、(株)化合物安全性研究所、(株)三商、(株)羊上社、国立大学法人弘前大学、山形スリーエム(株)、山崎製パン(株)、全国農業協同組合連合会、地方公務員(2)

生物生産科学専攻

(株)サンモアテック、トモエ乳業(株)、財団法人日本予防医学協会、社会福祉法人 豊徳会、昭和アステック(株)、上北農産加工農業協同組合、森産業(株)、曾我の屋農興(株)、地方公務員(3)、国公立教員

地域環境科学専攻

(株)大豊建設、(有)ピース、(有)ヤマサン、地方公務員

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。

新任教員の自己紹介



坂元 君年 准教授 (分子生命科学科 応用生命コース)

2011年9月から農学生命科学部に着任しました。生物のエネルギー代謝について、ミトコンドリアや細菌の電子伝達系を題材に研究を行っています。ミトコンドリア機能のほとんどは多くの生物で共通ですが、これまでは寄生虫に見られる特殊な例を研究してきました。ヒトと比較すると特殊ではあっても、そ

の性質の理解が進むと生物全体では数ある選択肢の一つであることが良く分かります。生物の可能性、多様性を探索し、その奥にある普遍性に触れることを目指しています。人間の多様性が些細なものだと感じられるほどに生物界の多様性を楽しめるような学問の展開を学生の皆さんと進めて行きたいと思っています。よろしくお願いいたします。



西野 敦雄 准教授 (生物学科 基礎生物学コース)

2011年1月に農学生命科学部生物学科に着任いたしました西野です。新しく仲間に加えていただいたことを心より感謝申し上げます。これまで尾索動物(ホヤの仲間)を主な研究対象として、動物の生理過程や発生過程の進化について研究を行ってきました。青

森県は三方を海に面し、しかも自然の海岸線が十分に保たれた、海産生物の研究にはもってこいの場所と認識しています。研究の発展を期しつつ、教育活動を通じて学生さんたちとともに成長していけたらと願っています。何卒ご指導のほどを、よろしくお願いいたします。



小林 一也 准教授 (生物学科 基礎生物学コース)

2012年4月に生物学科に着任致しました。同学科を退官された石田幸子先生に修士課程まで師事しまして、手代木涉元学長から続くプラナリア研究に魅了されました。東京工業大学大学院に進学し、プラナリアの生殖戦略に関する研究で学位を取得しました。その後、前職の慶應義塾大学医

学部に至るまで研究場所は転々となりましたが、幸運にも一貫して、この研究テーマを続けることができました。弘前は、白神山地や八甲田といったように、プラナリアの野外調査にも最適な場所です。手代木・石田両先生時代から弘前大学から発信されてきたプラナリア研究を発展させ、次世代に続くよう精進して参りますので、宜しくお願ひ致します。



笹部 美知子 准教授 (生物学科 基礎生物学コース)

2012年4月1日に農学生命科学部生物学科に着任致しました。岡山大学大学院自然科学研究科(農学系)を卒業後、名古屋大学大学院理学研究科で植物の細胞分裂の仕組みに

ついて研究を行ってきました。博士課程では、植物病理学の研究室で、植物の病原菌に対する防御応答、特に細胞死を伴う防御機構について研究を行ってきましたが、研究過程において細胞死と裏表の関係にある細胞分裂に興味を持ち現在に至っ

ています。細胞分裂の様子はいつも整然と美しく、何度見ても魅了されてしまいます。自然豊かな弘前で、この美しい現象の仕組みを少しでも解き明

かせるようがんばります。どうぞよろしく願いいたします。



金 児 雄 助教 (生物資源学科 生産環境コース)

2012年4月1日に昆虫生理学教室の助教に着任しました金児(かねこ)です。昆虫は成長していく過程で、脱皮と変態を経て成熟した成虫になります。この脱皮・変態を引き起こす要因や変態の際に起こる細胞死について分子レベルで解明することが、新たな害虫防除技

術の開発に繋がると考え、農業王国であるこの青森から新技術を発信するために研究を行っています。また学生諸氏に対しましては、身近な昆虫の研究を通していかに生物が精巧に作られているかを伝えていきたいと思ひます。どうぞよろしく願いいたします。



栗 田 大 輔 助教 (分子生命科学科 生命科学コース)

2012年4月1日に農学生命科学部に着任しました栗田です。これまで翻訳停滞解消機構の分子メカニズムについて研究してきました。専門は生化学です。光陰矢の如しといひますが、時が経つのは本当に早いもので、今年で弘前に来

て13年目を迎えます。ただひたすら夢中になって研究と格闘してきた12年間でしたが、これからは学生が学問に没頭できる環境作りと人材育成に取り組んでいきたいと思ひています。どうぞよろしく願いいたします。



教 職 員 人 事

退職 (定年退職) 平成24年3月末日

- 石田 幸子 (いしだ さちこ) 教授 (生物学科)
- 片方陽太郎 (かたがた ようたろう) 教授 (分子生命科学科)
- 鮫島 正純 (さめしま まさずみ) 教授 (生物学科)
- 藤田 隆 (ふじた たかし) 助教 (生物資源学科)

採用 (新任)

- 坂元 君年 (さかもと きみとし) 准教授 (分子生命科学科) 平成23年9月1日
- 西野 敦雄 (にし の あつお) 准教授 (生物学科) 平成24年1月1日
- 小林 一也 (こばやし かずや) 准教授 (生物学科) 平成24年4月1日



前大学農学生命科学部植物病理学教
~藤田 隆先生のご退職を祝う

- 笹部 美知子 (ささべ みちこ) 准教授 (生物学科) 平成24年4月1日
- 金児 雄 (かねこ ゆう) 助教 (生物資源学科) 平成24年4月1日
- 栗田 大輔 (くりた だいすけ) 助教 (分子生命科学科) 平成24年4月1日

(昇任)

- 吉田 孝 (よしだ たかし) 教授 (分子生命科学科) 平成23年4月1日
- 松崎 正敏 (まつざき まさとし) 教授 (園芸農学科) 平成23年8月16日

会費納入と住所通知のお願い

平成23-24年度会費5,000円を未納の方は、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。なお、すでに平成23-24年度会費をお納めいただいた会員には振込用紙を同封しておりません。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤 明 電話 0172-39-3842 (FAX 兼用) E-mail akudo@cc.hirosaki-u.ac.jp

松崎 正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

田中 和明 電話 0172-39-3816 E-mail k-tanaka@cc.hirosaki-u.ac.jp

平成23-24年度 同窓会総会報告

平成23-24年度総会が、平成23年7月9日15時から青森市のホテル青森において開催されました。同窓会長と学部長の挨拶に続いて、平成21-22年度事業報告および会計報告、平成23-24年度の事業計画、予算および役員案について、事務局より報告と提案がなされ、質疑応答の後、原案どおり承認されました。総会終了後には懇親会が行われました。

1. 平成21-22年度事業報告

(1) 平成21年度事業報告

- H21. 5.29 同窓会報第27号発行
- H21. 6.22 全学同窓会会費(14.8万円)の納入
- H21. 7. 4 同窓会総会(弘前市:ホテルニューキャッスル)
- H21. 7. 6 母校援助費(26万円)納入
- H21. 9.25 同窓会報の在学生家族への送付
- H21.10. 9 武田和義先生特別講演会(学士院賞受賞記念)
- H22. 2. 6 秋田支部総会(秋田市:イヤタカ)(斎藤教員・田中教員出席)
- H22. 3.24 卒業・修了生同窓会入会祝賀会

(2) 平成22年度事業報告

- H22. 6.29 同窓会報第28号発行
- H22. 9.28 全学同窓会会費(14.8万円)の納入

- H22. 9.24 同窓会報の在学生家族への送付
- H23. 2.19 山形支部総会(鶴岡市:ホテル都屋)(工藤教員・宮入教員出席)
- H23. 3.22 東日本大震災に対する「学部緊急対策委員会」設置(学部長の要請に応え、同窓会より工藤幹事が委員となる)
- H23. 3.23 卒業・修了生同窓会入会懇話会

<参考>

(平成23年度)

- H23. 6.20 同窓会報第29号発行
- H23. 7. 1 同窓会役員会(農学生命科学部1階小会議室)出席者14名
- H23. 7. 9 同窓会総会(青森市:ホテル青森)

2. 平成21-22年度事業報告

収 入

項目	項 目	H21-22年度 予算(案)	H21年度	H22年度	H21-22年度 決算	H19-20年度 決算	達成率 (%)	摘 要
A	繰越金	¥4,922,811	¥4,922,811	—	¥4,922,811	¥4,967,321	100%	
B	正会員会費	¥2,600,000	¥1,460,000	¥715,000	¥2,175,000	¥2,610,000	84%	計435名(H21は292名+H22は143名)、(H19-20年度は計522名)
C	入会費	¥2,400,000	¥1,110,000	¥780,000	¥1,890,000	¥2,400,000	79%	計189名(H21は111名+H22は78名)、(H19-20年度は計240名)
D	利 息	¥10,000	¥1,794	¥1,260	¥3,054	¥9,817	31%	
E	振替手数料	¥-80,000	¥-44,840	¥-24,240	¥-69,080	¥-77,300	86%	
F	そ の 他	¥100,000	¥99,000	¥0	¥99,000	¥135,000	99%	
	合 計	¥9,952,811	¥7,548,765	¥1,472,020	¥9,020,785	¥10,044,838	91%	

支 出

項目	項 目	H21-22年度 予算(案)	H21年度	H22年度	H21-22年度 決算	H19-20年度 決算	達成率 (%)	摘 要
1	会報発行費	¥2,650,000	¥1,343,240	¥1,258,949	¥2,602,189	¥2,482,660	98%	
2	卒業祝賀会費	¥900,000	¥615,350	¥277,500	¥892,850	¥1,155,886	99%	H21年分にはH20の集合写真代(15.9万円)を含む。震災によりH22年は卒業祝賀会をせず懇話会とした(13万円：例年の約半額)。H19-20年度決算額は3年分
3	支部派遣費	¥200,000	¥42,000	¥60,000	¥102,000	¥153,000	51%	H21年は秋田、H22年は山形
4	母校援助費	¥520,000	¥403,708	¥0	¥403,708	¥600,000	78%	H19-20年会費収入(501万円)の1割=26万円×2年を納入予定だったが、H21年度のみ納入。武田和義先生講演旅費等(¥143,708)を含む
5	総会経費等	¥280,000	¥194,000	¥0	¥194,000	¥261,030	69%	
6	庶務・管理費	¥100,000	¥23,696	¥34,600	¥58,296	¥72,750	58%	
7	通信・印刷費	¥100,000	¥64,290	¥0	¥64,290	¥70,415	64%	
8	慶弔費	¥50,000	¥24,380	¥10,251	¥34,631	¥30,286	69%	
9	全学同窓会会費	¥296,000	¥148,000	¥148,000	¥296,000	¥296,000	100%	
10	予備費(繰越)	¥4,856,811	—	—	¥4,372,821	¥4,922,811	90%	
	合 計	¥9,952,811	¥2,858,664	¥1,789,300	¥9,020,785	¥10,044,838	91%	

平成28年 6 月 2 日

平成28年 7 月 1 日

会計監査

氏名

工藤 啓一

会計監査

氏名

西川 明洋

3. 平成23-24年度事業計画

- (1) 総会の開催
 (2) 役員会の開催
 (3) 同窓会会報の発行 (第29、30号)

- (4) 支部活動への援助 (教員・役員の派遣)
 (5) 卒業・修了生同窓会入会祝賀会
 (6) 農学生命科学部への援助
 (7) 全学同窓会への援助
 (8) その他必要と認められる事業

4. 平成23-24年度予算

収 入

項目	項 目	H23-24年度 予算(案)	H21-22年度 実績	H21-22年度 予算(案)	前期比 (%)	摘 要
A	繰 越 金	¥4,372,821	¥4,922,811	¥4,922,811	89%	
B	正 会 員 会 費	¥2,150,000	¥2,175,000	¥2,600,000	83%	430人×@5,000
C	入 会 費	¥1,850,000	¥1,890,000	¥2,400,000	77%	(185人×@10,000×0.5)×2年
D	利 息	¥3,000	¥3,054	¥10,000	30%	
E	振 替 手 数 料	¥61,500	¥69,080	¥80,000	77%	(入会+定期会費)納入予想×@100
F	そ の 他	¥407,500	¥99,000	¥100,000	408%	総会会費等の特別収入(10万円). 寄附金 (入会+定期会費)納入予想数 615×0.5× 1,000円=307,500円
	合 計	¥8,721,821	¥9,020,785	¥9,952,811	88%	

支 出

項目	項 目	H23-24年度 予算(案)	H21-22年度 実績	H21-22年度 予算(案)	前期比 (%)	摘 要
1	会 報 発 行 費	¥2,650,000	¥2,602,189	¥2,650,000	100%	年 1 回×2年分
2	卒 業 祝 賀 会 費	¥900,000	¥892,850	¥900,000	100%	
3	支 部 派 遣 費	¥150,000	¥102,000	¥200,000	75%	
4	母 校 援 助 費	¥1,680,000	¥403,708	¥520,000	323%	H21-22年会費収入(407.5万円)の1割=21 万円×2年分+H22年度分(26万円)+震災 学生支援(100万円)
5	総 会 経 費 等	¥250,000	¥194,000	¥280,000	89%	
6	庶 務 ・ 管 理 費	¥80,000	¥58,296	¥100,000	80%	
7	通 信 ・ 印 刷 費	¥70,000	¥64,290	¥100,000	70%	
8	慶 弔 費	¥40,000	¥34,631	¥50,000	80%	
9	全 学 同 窓 会 会 費	¥296,000	¥296,000	¥296,000	100%	@148,000×2年
10	予 備 費 (繰 越)	¥2,605,821	¥4,372,821	¥4,856,811	54%	寄附金見込み (307,500円)を含む
	合 計	¥8,721,821	¥9,020,785	¥9,952,811	88%	

5. 平成23-24年度役員

役職名	氏名	勤務先	卒業年	教室名	*印新任
名誉会長	鈴木裕之	弘前大学農学生命科学部長			
顧問	岩井邦彦	元農学部同窓会長	32	土肥	
	中尾良仁	元農学部同窓会長	32	土肥	
	豊川好司	元弘前大学農学生命科学部長	38	畜産	
	高橋秀直	前弘前大学農学生命科学部長			
会長	三上巽	(株)青森ケーブルテレビ社長	42	農経	
副会長	成田博	青森県農林水産部農産園芸課長	53	果樹	*
	泉谷雅昭	弘前市監査委員事務局長	52	水利	*
	西川明満	元青森県農協中央会	45	作物	*
監事	齊藤寛	元弘前大学農学生命科学部	42	土肥	*
	岩谷健	青森県農協中央会	56	農経	*
評議員	工藤啓一	元弘前大学農学生命科学部	38	作物	*
	工藤信裕	元青森県庁	45	水利	
	菊池孝夫	平川市役所経済部	52	作物	
	櫻田隆夫	(株)東北建設コンサルタント	52	造施	*
	泉完	弘前大学農学生命科学部	53	水利	
	蛭名正樹	弘前市役所農林部	53	農地	
	古館行雄	三本木農業高校	55	蔬花	
	今智之	青森県産業技術センターりんご研究所	56	育種	
	奈良岡馨	青森県産業技術センター弘前地域研究所	56	農利	
	天内洋之	芝管工(株)	56	農機	
	三浦純司	J A相馬	56	果樹	*
	田中満	柏木農業高校	58	育種	
駒井秋浩	柏木農業高校	59	果樹		
清藤文仁	青森県産業技術センター農林総合研究所	59	生化	*	
加藤幸	弘前大学農学生命科学部	平4	造施		
鳴海純	弘前実業高校	平6	果樹		
山本晋玄	青森県病虫害防除所	平11	植病	*	
房家シン	弘前大学農学生命科学部(金木農場)	平16	畜産(院)	*	
	福田和光	大鰯町役場	平19	水利	
総務幹事	工藤明	弘前大学農学生命科学部	47	水利	
情報幹事	松崎正敏	弘前大学農学生命科学部	62	畜産	
会計幹事	田中和明	弘前大学農学生命科学部	平15	植病(院)	

支部だより**「わんどの会」(福島支部) に出席しました!**

2012年1月28日福島市で開催されました農学生命科学部同窓会福島支部総会に、大学より鮫島正純先生と工藤明(総務幹事)が出席致しました。事前の案内時に國分俊行支部長(農地S51年卒)より東日本大震災に対する大学の対応、特に福島原発事故に対する対応や活動を報告してほしいとの要望がありましたので、これに関わる弘前大学の主な対応状況資料と学園だよりを配布し、これを見て頂きながら、鮫島先生が説明をしてくださいました。学生への支援やボランティア、医師などの派遣状況、被ばく医療チーム、状況調査チームの継続派遣、さらに被ばくの被害が大きい浪江町との連携協定などの説明を聞いた福島県在住の卒業生からは、感嘆と感謝の声が上がりました。続いて工藤幹事から大震災に対する学内での学生支援状況(大学、同窓会、後援会の対応)をお話しし

ました。さらに総会では次期支部長に尾形正氏(植物病理S51年卒)を選出しました。その後、今回の出席者の最長老である畠澤國美氏(農工S43年卒)による乾杯の音頭で懇親会に入りました。弘前からの力水(弘前大学)と浪江町の老舗酒蔵「鈴木酒造」が避難先の山形県長井市で再起、醸し出した「磐城壽(いわきことぶき)」も出され、二次会での盛り上がりも含めて、福島県の復興を確信しました。出席者は弘前からの2名を含めて16名でした。翌朝、福島では珍しい積雪状況にも拘わらず医王寺と県果樹試験場を案内して頂きました。同試験場勤務の星博綱氏(気象H6年卒)の説明では、昨年来従来の研究に加えて、果樹の被ばく状況と樹木の徐染に関する研究も行っているとのことでした。

(文責:工藤 明)



秋田県支部出席報告

秋田県支部総会および懇親会が2012年2月18日、秋田市「イヤタカ」で開催された。秋田県内の卒業生24名と大学から教員2名（松崎（事務局）、加藤）が参加した。総会では、松本勤会長（S39 植病）によるご挨拶に続いて、松崎教員から昨今の大学情勢に関する報告が行われた。その後、支部の経過報告および会計報告が行われた。加えて、今回からの新たな試みとして、同窓生による学術講演会が行われ、第1回は発案者でもある松本会長（秋田県立大学短期大学部名誉教授）から「ユリ科の花・こまちスターのウイルス病研究・栽培法・経営試算について」と題した講演がなされた。同窓生の懇親と同時に、学術的な情報交換の場を提供しようとする試みは、今後の各支部運営にお

いて新たな可能性を示すものと思われる。

総会終了後、部屋を移し、伊東副会長（S50 昆虫）の乾杯の御発声に続いて懇親会に移った。先輩諸氏、後輩との懐かしい思い出話に花が咲いた。特に、今回参加させて頂いた私（加藤）は秋田出身ということもあり、同郷（五城目町）の先輩や高校の同窓生でもある太田智君（H4 育種）との久方ぶりの再会など、中身の濃い充実した時間を過ごすことができた。

最後に、今回の秋田支部の開催にあたってご尽力頂いた村上章さん（S56 生化）をはじめとした支部事務局の皆様へ謝意を表し、簡単ではあるがお礼の言葉としたい（文責：地域環境工学科 加藤幸）。



弘前大学農学部・農学生命科学部 同窓会
「秋田県支部総会」

平成24年2月18日(土)
於 イヤタカ

訃報

平成23年04月26日逝去 菊池卓郎（享年80歳） 元果樹園芸学教授

平成23年05月09日逝去 中村信吾（享年73歳） 元農産物利用学教授、元副学長

上記の会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)